

研究ノート

宝満山峰入行事「秋峰」について

山 村 信 榮

1 はじめに

ここ数年、宝満山における山岳で行われた修験道の行のうち、江戸時代まで夏季に行われた大巡り行について、ルートの復元や行で使用された遺跡の状況について報告してきたが、本稿では平成25（2013）年4月25日から28日にかけておこなわれた宝満山（筑紫野市・太宰府市）から英彦山（田川郡添田町）に至る山岳抖擻（とそう）の行である宝満山の秋峰（大峰）について述べる。この平成度におこなわれた秋峰は宝満山修験会が宝満山開創1350年を記念し、約150年ぶりに再興されたもので、約60kmの往路のみの行程であった。当時、宝満山は史跡指定の意見具申を国に提出した段階であったこともあり（平成25年10月17日の官報告示により指定）、筑紫野市教育委員会が主体となり太宰府市教育委員会が協力する形で峰入に随伴し記録調査をおこなった。筆者はその調査に参加する機会を得たが、これまでの間に調査成果を報告する機会を逸していたため、備忘録的に成果の一部を記し、4日目の英彦山奉幣殿前でおこなわれた採灯大護摩供のことを含めた詳細な報告は、今後公表される本報告書に委ねたい。併せて遺跡としての、また行場としての行者堂の様相について触れてみたい。

2 平成度の峰入ルート設定

今度の峰中先達を務めた八女市星野村福楽寺住職石橋弘勝氏への聞き取りにより知り得た平成度の宝満山から英彦山への峰入のルート設定は次のよう前提でおこなわれた。

ルート設定にあたっては主に森弘子氏と長野覚氏の業績に拠った。森氏は昭和40年代より宝満山研究の論考を発表され、竈門神社の信者宅、宝満二十五坊末裔宅、京都聖護院などで史料調査をし、『筑前国宝満山信仰史の研究』（昭和55年 名著出版）、『宝満山の環境歴史学的研究』（平成20年 岩田書院）などにおいて宝満山の峰入の実態を明らかにした。また、昭和57年の宝満山修験会の復興に際して奔走された。森氏は宝満の秋峰を復元するに当たり「鎮西竈門山入峰伝記」（永福院蔵）、「峰中金剛記」（永福院蔵）、「峰中胎蔵界記」（永福院蔵）、「修要伝法集」（道場坊蔵）、「宝満山峰中流記」（叶院蔵）などを基礎資料として使用されている。

長野覚氏は英彦山守静坊に出自を持ち、長年英彦山研究に関する論考を発表し、昭和57～59（1982～1984）年に英彦山の春峰（英彦山-宝満山）と秋峰（英彦山-福智山）を実際に踏査し、その成果は『英彦山修験道の歴史地理学的研究』（昭和62年、名著出版）により体系だって公にされている。春峰の復元に当たっては英彦山守静坊文書の文久4（1868）年『従因至果峰中日録』および同坊文書文化2（1805）年『従因至果峰中録』、宝徳2（1450）年「彦山春峯四十八宿次第」（『彦山三峯印信併闕伽』）、多聞房所伝の『入峰中秘密行要口決』などの江戸期を中心とした英彦山の文書が使用されている。氏は英彦山春峰四十八宿のうちの40箇所について文書の分析と踏査所見から場所の比定をおこなっている。石橋氏は清滝院宮崎隆行氏をはじめとする宝満山修験会の有志と平成23年より2年間をかけ、延べ50回以上の踏査をおこなった。長野氏の資料をして不案内であったのは小石原町内の山林であったという。特に大藪峠から芝峠間は山中の通行も絶えて久しく、樹海での苦闘を強いられたが、地元古老の柏の木が古道の目印であるという言に助けられ、まさに道が開けたという。

3 使用されたルート

平成度の宝満山から英彦山までの峰入りは往路のみで、竈門神社を出立し山頂までは内山から一ノ鳥居を経由し西院谷、中宮跡を経由し山頂に至る、旧来からの登拝路。宝満山頂からは山内の獅子宿跡（通称、長床）を経ずに、三郡山まではいわゆる「三郡縦走路」を辿り、三郡山東斜面の旧路を辿って米山峠へ、そこからは現在の車道を辿らず柚須原地区の山中の小径から扇瀧を経て北側から大根地山頂に至った。大根地神社からは南西にある参拝路を辿り冷水峠に至り、そこからはゴルフ場により開発された山地になるため場内の舗装された公道を東に移動し五玉神社を経由して白坂峠まで。そこからは郡境である山の最高所の尾根線を東に辿り、新八丁峠、旧八丁峠を横切り、そのまま稜線伝いに登り途中で九州自然歩道のルートに合流して古処山頂方面に向かい、山頂下の古処山城の郭跡から北に下山して古処キャンプ村に初日の宿をとった。二日目は古処山頂から嘉麻峠まではほぼ九州自然歩道のルートを通った。嘉麻峠から次の大藪峠間のルート復元が問題で、現状では小径さえ廃れてなくなった郡境の山の稜線を一部の私有地を経由して辿ることとなった。大藪峠から金剛坂間はピークを避けて横駈けして芝峠に至った。芝峠から次の不動岩へは郡境の稜線を設定していたが一部横駈けし、二又山（兄弟岳）から藩境石を辿るも掘削された林道にルートを邪魔されながら小石原深仙宿に至りそこで宿をとった。三日目は深仙宿行者堂よりは近年整備されたルートで貝釣り、笈釣り、糸ヶ峰から愛法窟を経て大日岳山頂、切石峠より釈迦岳山頂に直登し、筑前・豊前・豊後の三国境のピークを通過して岳滅鬼山へ。豊後との国境線を下って岳滅鬼峠に至り、引き続き国境稜線を辿って、猫の丸尾手前の中世土器の散布地を経由し、いよいよ英彦山内の猫ノ丸尾のピークを過ぎて北の稜線に転じ、籠水峠から岩崖の下道を辿って鬼杉に至る道筋で、この日は英彦山しゃくなげ荘で宿をとった。最終日は鬼杉から大南窟、材木岩を経由して南岳で勤行、中岳に参殿勤行し、奉幣殿に降りて大護摩供をおこない、車両で移動し竈門神社にて奉告祭をおこない満行となった。

4 峰中作法の構成

今回の峰入でおこなわれた行は先達を務めた石橋氏を中心に企画されたものである。

勤行の基本は1法螺（宝満流）、2錫杖經、3般若心經、4諸真言・諸御法号、5本覚讃、6法螺の順でおこなわれ、途中で先達が仏頂尊勝陀羅尼を唱えることがあった。場に応じて臨期に諸真言や法号などは組みかえられ、般若心經のみが唱えられた箇所（頭巾山頂＝化生宿推定地）もあった。勤行を行った箇所では碑伝を据え置いた箇所（宝満山中宮跡、宝満山頂、大根地神社、古処山頂、屏山山頂、馬見山頂、馬見御神社岩、不動岩、深仙宿行者堂、鬼杉、大南神社、英彦山南岳、中岳、産霊神社、下宮）、釘で打ちつけて札打ちした箇所（五玉神社、二又山、大日岳、釈迦岳）などがある。供花はおこなっていない。また、関伽水を上げたところ（宝満中宮跡、仏頂山頂心蓮上人祠）、護摩行をおこなったところ（屏山山頂、不動岩）、出生灌頂をおこなったところ（愛敬瀬戸＝愛法窟）がある。また、宿泊に際しては宿取、宿払の作法が修された。

勤行は經の内容から奉祀する諸仏・諸神への帰命と峰中安全を祈念する性格が読み取れるが、石橋先達が峰入に携行した『金剛胎藏峰入記』なる自書の備忘録中にある「勤行表白」文には「謹ミ敬テハ經典読誦ノ慧業ヲ本尊ノ法味ニ資シ奉ル・仰ギ願クハ天下泰平・国土安穩・仏法興隆・万民豊樂・正ニ今ココニ宝満修験道・峰中修行者一同・法樂莊嚴威光増益ノ誠ヲサタシ峰中安全・宝満修験興隆決定成就・及以法界・平等利益」とあり、今回の峰入の意義が余すことなく表現されている。氏への聞き取りでは、事前に宝満山二十五坊末裔永福院所伝の文書に宝満流の峰中作法に関する

るものがあつたため、作法の順序だてなどは文書から復元したものという。しかし、詳細については直接伝授された行法でないため、自らが修行中に会得した行法に拠らざるを得なかったという。今回の峰入りの先達を務めた石橋弘勝氏は天台宗三井寺系統に出自を持ち、比叡山において千日回峰行の随伴を務め、その後、大峰山にて行を積んだ経緯があり、この度の峰中作法についてはその影響下にあるものと思われる。また、宝満山修験会会員個々の出自は宗派や門流が異なるために、経や真言の読みや抑揚などに相違があり、唱和する際に略されたものもあつたという。

5 行者堂について

秋峰においては宝満山中宮裏側の梵字岩前、行中の金剛界と胎藏界の境に置かれた小石原深仙宿、英彦山中岳西側にある行者堂（産霊神社）で勤行をおこなった。宝満山の行者堂は明治初期に破却され、堂舎が失われ本来の形を保っていない。英彦山の行者堂は中岳上宮殿の西に在り英彦山神宮産霊神社として社殿が建て替えられている。三か所の中では小石原深仙宿のみが行者堂として機能し、旧来の形が保たれていると考えられる。

小石原の行者堂は宝満山と英彦山の金剛界と胎藏界の境に位置付けられた行場中の要所であり、160㎡ほどの境内に石灯籠と石積基壇に堂舎、石積の護摩壇、石祠などがある。堂舎内には文禄4（1595）年に肥前国叡盛が奉納した銘のある高さ95cmの檜材寄木造りの役行者像と前鬼、後鬼の木像が祀られている。堂の正面には石積みの大護摩壇（県指定有形民俗文化財）がある。直径3.1m、高さ0.9mで、天明2（1782）年造立の碑が横に立っており、平成元年に一度、解体修復されている。護摩壇から続く石段を上った先に香精童子を祀る石祠がある。堂の近くに湧水地があり香水池の名称で閼伽水を取る場として維持されている。もともと香精童子がこの閼伽水を守護する形であつた。この場所は金胎両部の境であると同時に、豊前国と筑前国の境であり遠賀川水系と筑後川水系の分水嶺でもある。大和大峰の峰入りの行場にも同名の深仙宿があり、灌頂や秘儀であつた護摩の作法が伝授されるなど峰入り行中で最重要な行場として知られ、英彦山修験の春峰ではこの場において日課勤行に加え閼伽水作法、懺悔行、大華立、採灯護摩、祈祷などがおこなわれた。

英彦山神宮産霊神社となつた英彦山中の元行者堂は、よく見ると基壇登り口の石段に一部弧を描く石材が利用されており、堂舎の前に石積みの護摩壇があつたことを示している。

宝満山の行者堂は中宮跡の北側の背面に江戸末期まであつた。180㎡ほどの空間には、文保2（1318）年銘のある五転具足の金剛界と胎藏界の大日如来の梵字種子を円相で囲んだ薬研彫の磨崖の巨石が屹立し、その前に行者堂があつた（図中、基壇1）。『筑前国統風土記附録』によれば堂舎前に護摩壇、笈立岩、七大童子の祠（図中、基壇2）があつたようだ。堂舎の規模と仕様は『宝満山中絵図』には「役行者堂 二間五尺、・二間半、栩葺、外キリ陰」とある。秋峰の際には碑伝を建てる場であつたとされる。石積みの基壇の前には今も長さ1.6m、厚さ0.4mの弧を描く石材があり、円弧を利用して図上で復元すると直径2mほどの円形になる。護摩壇上面の石材である可能性が高く、径は小石原のものより1mほど小さくなる。閼伽水はこの中宮跡の一段下の西院谷の坊跡中に設えられている。

このように行者堂を取巻く空間構成としては、主たる堂舎、童子を祀る小祠、護摩壇と閼伽井という点で宝満山と小石原深仙宿とは同じものを備えているといえる。その背景には修験道の行をおこなう装置としての必然性があつたものと考えられる。

6 復元的考察と今後の課題

この峰入のルートは九州における修験道の二大聖地である宝満山と英彦山を最短で繋ぐルートであり、地理的な特性では玄界灘と有明海との分水嶺を筑前・豊前・豊後の旧三国の国境を取り込みながら繋いでいるルートでもある。かつて峰入という一大行事が成立した背景には教団としての求心力の保持、行法の伝承等々、さまざまな要因があったものと推測される。しかし、一方で今回の行事において「段列」と呼ばれたサポート隊の存在は重要かつ不可欠であることが深く認識されたが、車両や食料品店のない時代にあっては、当然、ルートとのつながりを持つ里の存在は、行事を遂行するにあたって欠くことのできない要素であったと思わざるを得ない。長野覚は先の論考の中でこの峰入道が峠をつなぐルートであったと指摘したが（分水嶺を山でつなげば当然の帰結ではあるのだが）、峠はまさに修験者と里人との接点であり、補給や連絡などをおこなった要地であったと思われる。米山峠の石祠や馬見山中のハンドウ仏（栗河内分かれ）に見られるように、そこは里人によって小祠が営まれた聖地でもあり、峠は里人が待ちわびた修験者を待つ約束の地でもあった。峰入が一方的に寺社の原理によってのみ催行されたものではなかった側面も読み解く必要があらう。「天下泰平・国土安穩・万民豊楽」の念はいつの時代においても変わらないはずである。

山岳の頂に経塚が営まれた平安時代後期頃から、この峰入のルートは彼杵から国東に至る九州の東西を繋ぐ密教世界の背骨の一部として認識されており、宝満山と英彦山という両巨頭が、相克した時代の歴史を越えて相互にこのルートを共有して、行場を成立させ維持してきたことに大きな意義があるといえる。その背景には古代末に企画された壮大な構想が隠されているように感じられる。

微細なルートや宿の位置の認定について全てが解決したものではないことは、今回の復興により改めて認識された。先の課題としては先学が取り扱った文書など文献史料の検証、字以下のホノケのレベルまでの地名の採取、埋蔵文化財の視点を持ったルートの再探索、ルートと里との関係性を明らかにするための体系的な民俗調査などが望まれる。これは一市町村で負えることなく、連携した広域な活動が求められる。

ルートの復元については以上のようなことが考えられるが、峰中作法の復元については我々が立ち入る領域ではない。法螺については宝満山に伝えられた獅子流が伝承されているため、宝満山のオリジナリティーは確保されているといえる。一方で、宝満流の峰中作法については文字世界の情報になってしまっており、子弟間での伝法を前提とする密教的世界にあっては復原ということになれば難しいことなのかも知れない。

とはいうものの森氏の調査により明らかにされている宝満二十五坊各末裔の伝承する資料は、行法の伝承が途絶えた現状においては行事の再興にとっては重要であり、明治から昭和にかけておこなわれた峰入については、再調査する価値は十分にあると思う。その資料には平成度にはおこなわれなかった、宝満山から宗像に向かった春峰（葛城峰）についての記録があり、大巡り行と併せて宝満山での山岳抖擻行の全体を知るためには詳細な分析をおこなう必要がある。それにより現在では認知されていない遺跡の存在に気付くことができるようになり、さらに手厚い霊山としての保存につながるものと考えられる。

文末に平成25年の峰入りの概要と、石橋弘勝氏が峰入りに先立って作成し、峰入り中に携行した『峰中修法』を紹介しておく。

○平成25年宝満山修験道大峰修行の概要

主催 宝満山修験会 共催 竈門神社

総括 藤野賢隆（本行院）

峰中行者

峰中先達 石橋弘勝(福楽寺)、新先達 吉開賢淳(千乗院)、準先達 宮崎隆行(清龍院)、矢野俊光(天ヶ瀧)、度衆 大岡良明(宝照院法嗣)、高橋康德(永福院法嗣)、藤野賢了(本行院法嗣)

段列

特任先達 原田豊隆(円通院)、準先達 吉武賢清、星一龍、度衆 芹田賢慶、小野照観(所属、肩書は調査当時)

※本文は山村が平成25年8月15日に作成した報告文書に加筆したものである。

○『峰中修法』

峰中護摩 不動法ニ順ズ

先、道場荘厳

次、禮佛三礼

帰命頂礼

本尊聖者 大聖不動明王

次、着座

次、塗香、酒水、護身法 常如

次、敬白 杵ヲ取ル

敬テ教主 大日如来、本尊界会、五智、五佛、両部会中、大曼荼羅、諸尊言主、法孫、佛子、峰中行者、両部ノ大法伝テヨリ、以来、修行既ニ積ミ採燈火壇ヲ建立シ五大明王ヲ勸請供養シエル。是ノ大明ハ五智ノ如来ニシテ、慈悲満徳ノ大権薩埵ナリ。其心禪定ニシテ常ニ三昧ニ住シ、衆魔ヲ降伏シテ正定ニ入ルニ、大智慧ヲ得ケテ、障礙有ルコト無シ、能ク衆生ニ随テ大法輪ニ依テ、大忿怒ヲ現ジ、難伏ノ者ヲ縛シテ安穩ヲ得ケ玉ウ。故ニ精誠ヲ勵シ、勸請供養シエル降臨影向シ玉ヒテ、哀愍納受シ玉ヘ、仰願ハ佛子カ丹誠ヲ證明シ、心中ノ善願決定成就シ玉ヘ、令法久住利益（金一丁）、人天、護持行者滅罪生善、及以法界、平等利益、南無大聖五大明王（金一丁）

次、祈願

金輪聖王、玉體安全、天長地久、御願圓滿、五大和合、国土清誼、風雨順時、五穀成熟、十方信檀、除災招福、萬民興楽、如意満足、山上安穩、佛法興隆、峰中安全、災眚悉除、信心佛子、行法無障、二求両願、悉地成就。

次、五大願

衆生無辺誓願度、福智無辺誓願集、法門無辺誓願学、如来無辺誓願侍、菩提無上誓願證。（丁）

次、大法螺

次、読経（一同）

- ・ 錫杖経
- ・ 普門品
- ・ 般若心経

・諸真言

次、結界法

次、正念珠

・大日・文殊八字・金剛チ・不動・火界咒・一字降々

ナマクサマンダバサラダン アビシャロキャウンハッタ

次、不動印明 刀印明

次、護摩 本尊壇

次、積木。次、扇火 オンボジバラウン。次、金剛鑢磨 オンンキリキリバサラウンハッタ。次金剛羯磨 オンバサラゲルマケン。次、四字印明 ジャ・ウン・バン・コ。次、灌請 火燠ノ中ニカン字有り。変ジテ不動明王ト成ル。身状殊ニシ空中ニマシマス形ノ如シ。次、房華

慈救咒 ヤンケクロ□ 唯願本尊 不動明王 加被此处 納受御ラ供。

次、奉請印

ナマクサマンダボタナンア サルバタラ ハラチカテイ タタギヤタ クシャボウヂサリヤ ハリフラキャ □

次、三禮 オンアミリティガナ／＼ウンハッタ

三漸 サンバラダバサラタン

次、観内護摩義

次、小杓、乳木、粥、飯、生、花、未、丸

次、芥子 ナマクサマンダバサラナンカン アビシャロキャウンハッタ

次、乳木 五十回 五十回

次、相、物

次、祈願

滅罪生善 興法利生 大願悉地 決定円満

次、三灑 サンアミリティカナ／＼ウンハッタ

三灑 オンバラダバサラタン

次、奉送華 慈救咒 ゲッシャ／＼□

次、取籌掃 オンセイティ マカセイティ ギヤダネイ□

次、念誦 ・諸尊・ボロン

次、不動根本印

次、不動刀印

次、隨方廻向 所修功德 廻向大日如来 廻向本尊界会 廻向三部界会 諸尊聖衆 哀愍摂受 自受法樂 所修功德 廻向一切神等 廻向一切靈等 廻向聖朝 所修功德

廻向仏子 廻向大衆 滅罪生善 大願円満 廻向伽藍 廻向天下 廻向三途八難 廻施法界 廻向大菩薩 丁

次、本覺讃 ・撥遣法 ・三部被甲 祈念

次、総廻向

次、三禮

以上

宿取作法

先達が宿所を選定し、境内の正中に南面して座す。

先、護身法

次、慈救呪 七返

(境内を右回り三回 慈救呪を唱えながら)

次、五大明王を祈念

次、錫杖経

次、不動印 刀印

次、請車輅印明

次、当峰修行一行の御加護をたれたまえ

次、心経 一卷

次、本覚讃

(請車輅印明) ナマクシチリヤ・ジビキャナン タタギヤタナン・オンバサロウウギニヤ キャラ
シャヤ□

愛法窟 出生灌頂 集要伝法集より

先、新客、窟前に進み、先達はその後に立つ。

次、先達 金剛界大日明三返 オンバサラダン 智拳印。それから撥達し新客に伝授。大先達は
窟の後に立ち、胎蔵界大日明を三返誦しながら新客を迎請する。八葉の印。新客に伝授 オンア
ビラウンケン。

『上天託胎』 岩の割れ目を金剛界から胎蔵界へ通り抜ける作法。

全員終わり・心経・慈救呪 七返・本覚讃

出生灌頂により上求菩提から下化衆生できる身に生まれかわり、これより衆生救済度の修行とな
る。

宿払作法

先達が暁天に座を起ち、度衆とともに掃除を点検。

境内

左回を三回巡る。慈救呪を唱えながら座に着く。

次、護身法

次、心経 一卷

次、送車輪印

次、撥遣法

次、本覚讃

(送車印明) ナマク・シチリヤ・ジビキャナン タタギヤタナン・オン バサロウウギニヤ・ゲッ
シャゲッシャ□

降三世明王 オン・ソンバ・ニソンバ・ウン・バサラ・ウン・ハッタ

軍荼利明王 オン・アミリティ・ウン・ハッタ (甘露呪)

オン・キリキリバサラ・ウン・ハッタ (金剛軍荼利呪)

大威徳明王 オン・シュッチリ・キャラロハ・ウン・ケン・ソワカ ※手印は内縛して

金剛夜叉明王 オン・バサラ・ヤキシヤ・ウン ※手印は内縛して

勤行表白

謹ミ敬テハ經典読誦慧業ヲ本尊ノ法味ニ資シ奉ル・仰技ギ願クハ天下泰平・国主安穩・仏法興隆・萬民豊楽・正ニ今ココニ宝満修験道・峰中修行者一同・法楽莊嚴 威光増益ノ誠ヲサタシ 峰中安全・宝満修験興隆 決定成就・友以法界・平等利益

金剛胎蔵入峰記

竈門神社 お祓の義 AM12:10

神社出発 AM1:00

・中宮勤行

宝満山頂

・上宮勤行 ・普門品・ダラニ尊勝 虚空童子 ・心經

座主跡

獅子宿 峰入の時はここで前行を行っていた。（三千佛礼拝・錫杖經・觀音經・尊頂ダラニ・阿弥陀經 垢離の法・潮井川で身を潔める。）

裏山伝に出発

仏頂山 勤行 ・心經

八葉童子（長崎鼻） 十五丁 化生童子（頭巾山付近）十五丁 船石童子 十丁 帝釈童子

三郡山 金剛坂（急な下り坂） ※荒谷（筑穂町山口）の西に出ていた。

米山峠（宿あり） 不動明王堂があった。現在は弘法大師がある。

次 峯道はあるが今回は林道を通る。

大根地神社 奥殿、本殿 勤行（お祓い）。本地地藏ササの寝手（ねじ）。童子がまつてある。

參道を下る 国道二百号に出る 一般車道を通る ゴルフ場の横

五玉神社 五玉大権現 勤行 ダラニ 心經 ・熊野速玉神・大国主神・事代主神・伊弉冉神・天忍穗耳命 昔はここで一宿。

白坂峠

ほぼ林道を通る。

八丁峠 白刷山（白河宿） 二里 野口宿 一里 貴禰ガ尾（金剛喜サワが道端に祀られていた）

古処山（白山） 檢増童子↓

古処山の下谷（冷水童子） 古処山勤行・白山権現（古処大明神）

古処山奥之院 弥勒の岩屋 大将隠し

キャンプ場 一泊

キャンプ場出発

古処山 礼拝 一里

屏山 両界岳 両界童子 勤行 山頂に天然の護摩壇の跡がある（ほぼ中間地点）

一里 大徳岳 大徳童子 ※右の谷に宿あり 千種城があった。天気が良ければここで野宿していた。 一里

馬見山 檢光童子↓

北に下ると御神社磐の断崖 勤行 昔、業の秤り 西の覗き行が行われていたのではないか？

十丁 桑名童子 一里 古杉童子（栗河内に下る所 南面に水場・宿あり）

不動岩 二里 三腰童子

嘉麻峠 悪除童子↓

二里 平地童子 除恶童子（大日宝性仏が祀ってあった。） 砥石ヶ谷 大藪峠 金剛岳童子 惣
八大金剛童子 芝峠

不動岳 宝満山伏のサンゲ行場 深仙宿から七日間参拝スル 勤行（不動護摩法）

二股山（兄弟獄） 十五丁

深仙宿 役の行者を祀る 勤行の事 宿（ 深仙宿 二十丁 陣ノ尾山

笙岩屋 大きな洞窟があり昔は50～60人は入る。ここでも修行したが、笙を（竹ふえ）を吹き、踊
りを舞ったと伝えられる。※冬の籠りの行。

笈釣り岩 貝釣り岩 法螺をふいては通れない道 糸ヶ峰

愛法窟 出生灌頂 新客の秘儀 知賢の峯 これまで上求菩提 これから下化衆生

理拳の峯 五丁 米童子 十丁

大日岳 愛光童子↓

切石峠 昔は駈けもどりと言って道のない谷下に玉置童子、慈悲童子を経て、釈迦岳から大日岳
に戻り、尾根に上って水呑童子に至る。泉があり宿あり。

釈迦岳 慈悲童子↓

湯谷越 香岩峠 深倉越 岳滅山 岳滅峠 猫ノ丸尾

籠水 本来は籠水から谷を二つ越えて大南宿へ行き、豊後岩屋にまわり、峯を二つ越え二十丁登り、
俗躰岳に行き、胎蔵権現、除魔童子を拝し、谷を越え、上客の胎蔵権現を拝す。

鬼杉 宿 大南神社（不動） 勤行 材木岩

南岳 勤行

中岳 上宮 胎蔵権現 本地阿弥陀仏如来

行者堂 勤行 彦山の四修行の中心道場である。役行者、七代童子、善爾子童子 奉幣殿の上 下
宮

奉幣殿 大護摩供

（平成25年8月2日 石橋弘勝先達より山村が借用し写す）

※難読か所は□としている。また、紙面の都合上、一部を改行せず列記している。

【参考文献】

中野幡能『筑前国宝満山信仰史の研究』1980年名著出版

長野覚『英彦山修験道の歴史地理的研究』1988年名著出版

森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』2008年岩田書院

山村信榮・中村茂央「宝満山大巡行ルートの遺構―大南窟および中院について―」『太宰府市公文書館紀要一年報太
宰府学―』第15号2021年太宰府市公文書館

山村信榮「宝満山大巡行ルートの遺構2―法城窟、福城窟、益影井、風穴について―」『太宰府市公文書館紀要一年
報太宰府学―』第16号 2022年

（やまむら・のぶひで 太宰府市教育委員会文化財課調査係長）

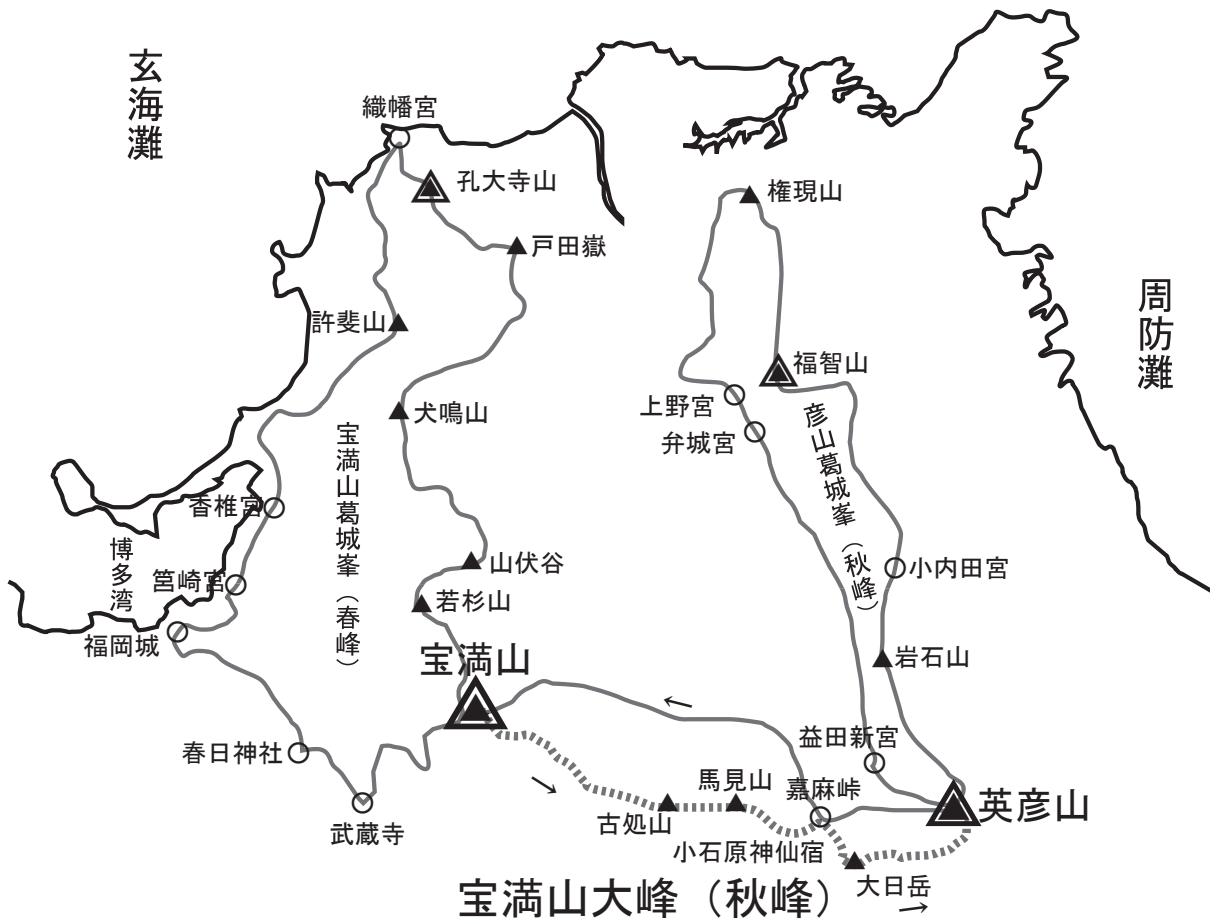


図1 宝満山と英彦山の峰入ルート（江戸時代）



※ 地図は国土地理院電子Globeを使用

図2 復興された宝満山秋峰ルート（2013年4月）



1 竈門神社出発（4月24日）



4 大根地山抖擻（4月25日）



2 宝満山頂勤行（4月25日）



5 古処山手前の峰入り道（4月25日）



3 仏頂山頂勤行（4月25日）



6 屏山（両界岳）山頂勤行（4月26日）

図3 宝満山秋峰の行程1（2013年4月）



7 栗河内の追分ハンドウ仏勤行（4月26日）



10 宿払の作法（4月27日）



8 小石原峠（4月26日）



11 糸ヶ峰の行（4月27日）



9 小石原深仙宿行者堂勤行（4月26日）



12 愛法窟の出生灌頂（4月26日）

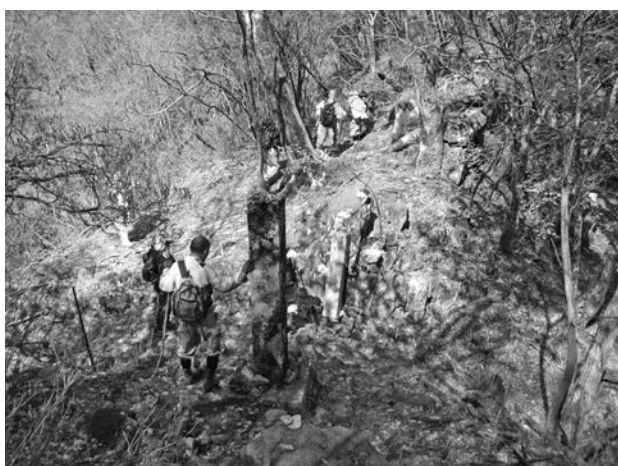
図4 宝満山秋峰の行程2（2013年4月）



13 岳滅鬼山頂より英彦山方面を望む（4月27日）



16 英彦山大南窟（4月28日）



14 岳滅鬼峠（4月27日）



17 英彦山南岳下の鎖場（4月28日）



15 英彦山鬼杉の勤行（4月27日）



18 英彦山中岳上宮勤行（4月28日）

図5 宝満山秋峰の行程3（2013年4月）



19 英彦山中奉幣殿前護摩供（4月28日）



20 英彦山中奉幣殿前集合写真（4月28日）



21 竈門神社奉告祭後集合写真（4月28日）

図6 宝満山秋峰の行程4（2013年4月）

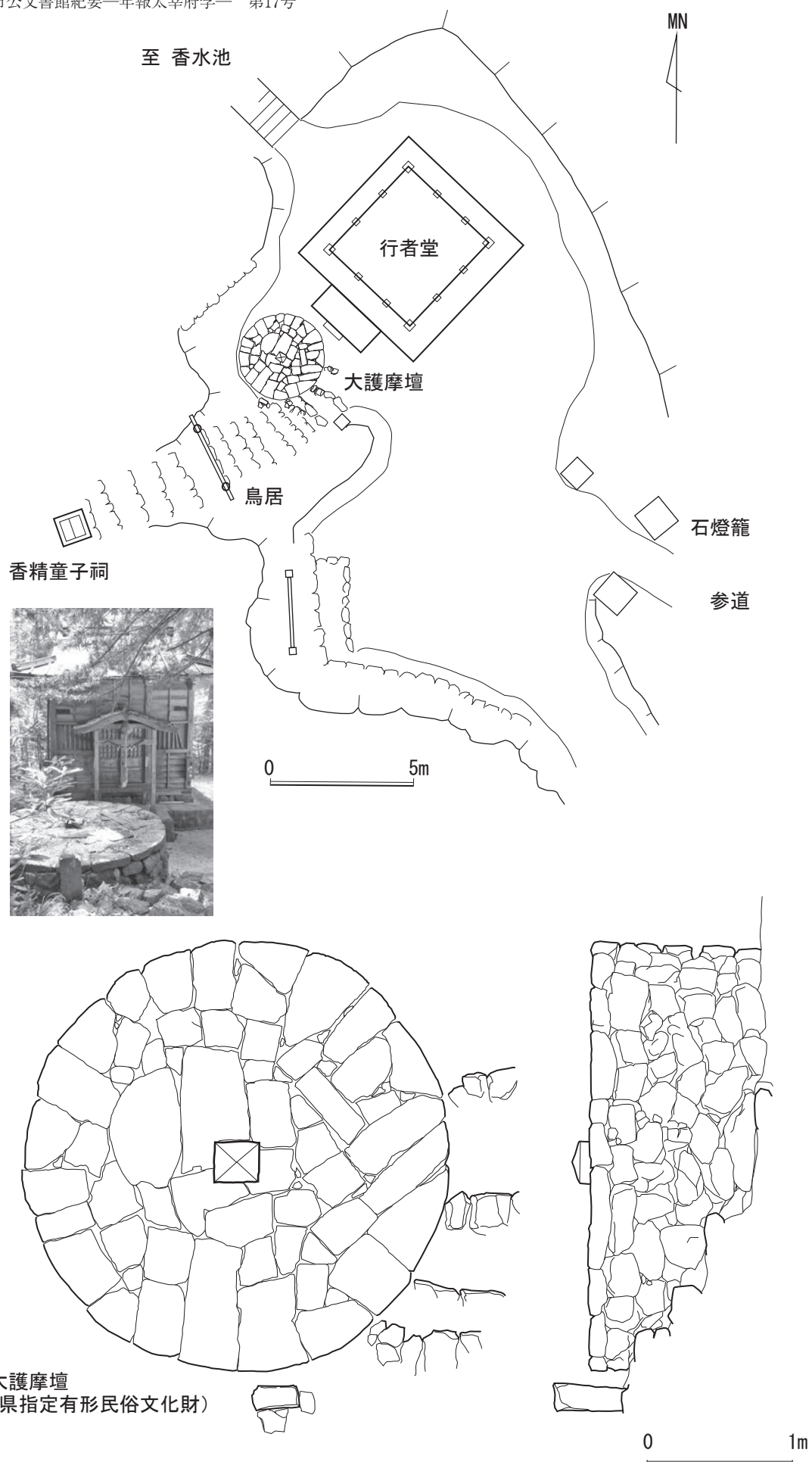


図7 小石原深仙宿 行者堂測量図 (1/200) 及び推護摩壇実測図 (1/40)

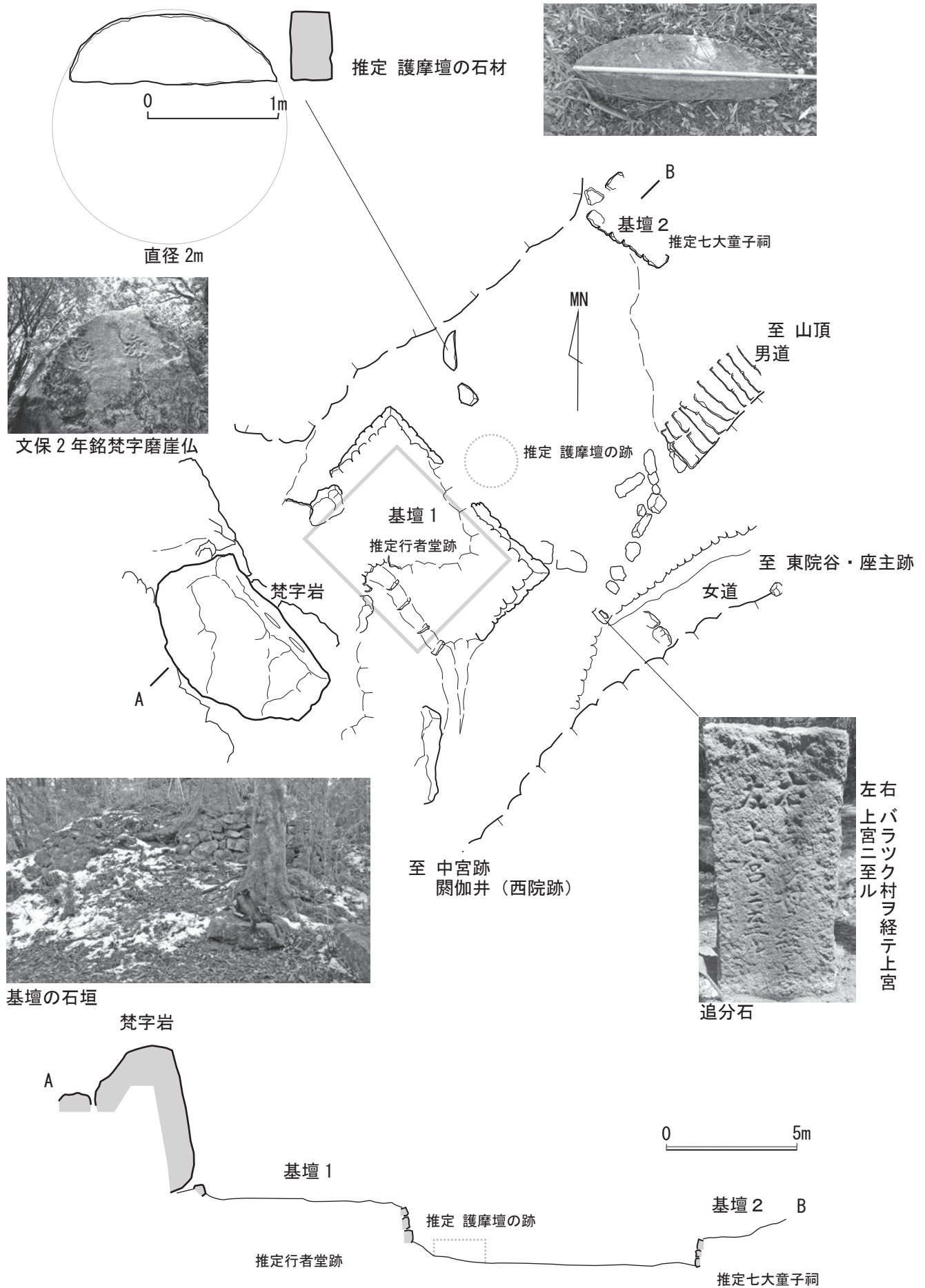


図 8 宝満山行者堂跡測量図（1/200）及び推定護摩壇石材実測図（1/40）